

市史講座第4回ミニレポート

7月13日(土)第4回の講座が開かれました。

第1部：「中世出雲神話の世界と意宇六社」(講師:島根大学名誉教授 井上寛司 先生)



はじめに、一般的には古代から神話が連綿と続いていたとする理解に対して、古代と中世とでは、神話の内容に大きな変化があることを紹介されました。

意宇六社についても同様に、中世では古代や近世以後とその在り方が異なっていたと説かれ、「意宇六社」の中世独自の在り方と、現在「意宇六社」と呼ばれるに至る過程を、刊行中である『松江市史』の中世史料を取り上げて説明されました。

神魂神社、真名井神社は、中世にはそれぞれ「伊弉冉社」「伊弉諾社」と呼ばれ、両社は「両神魂」とも称されたこと、六所神社は「惣社」とも呼ばれ国府に隣接した国の惣社であったこと、さらに国衙在庁官人により運営されており、従来の「佐草社」を「惣社」に転換した社であったことを述べられま

した。

このように、神魂社、伊弉諾社、惣社は、古代から国府との関係の強い社でしたが、承久の乱を第一の契機として杵築大社、国造家との関係を強め、戦国時代の尼子氏・毛利氏との関係を第二の契機として現在の形に繋ることを指摘されました。

神魂社と伊弉諾社・惣社が杵築大社と緊密な関係にあったのに対し、揖屋社、熊野社、佐草社・八重垣社はともに荘郷鎮守で、鎌倉から戦国時代にかけて杵築大社と国造家との関係を強めていった経緯を述べられました。

こうした状況を踏まえて、六社の関係は相互に緊密さを増し、名実ともに「意宇六社」と称するようになったのは元禄～宝永頃になると推測されています。このように中世の時期では、独自の信仰の世界が展開されていたことを説明されました。

第2部：「石垣から松江城を考える」(講師：岡山市教育委員会文化財課長 乗岡実 先生)

乗岡先生は、石垣は築かれた時期や機能によって違いがあり、修理の痕跡や刻印を観察することによって、松江城の歴史を知る事ができるとお話されました。

まず、一見しただけでは同じに見える石垣も積み方や石材を観察し、安土城や岡山城など他の城の石垣と対比させることによって、さまざまな事がわかってきます。現在の松江城の石垣は堀尾氏の築城時に積まれたものばかりでなく、長い年月の間の災害や経年変化で崩れたりしてしばしば修理されました。乗岡先生は実際に松江城のいろいろな場所にある石垣の積み方をスライドでわかりやすく説明されました。また、石垣の視覚的効果ということで、一の門付近の石垣には巨石が配置されているという興味深いお話もありました。

この他に、松江城の石垣の刻印の分布図を示しながら、松江城の石垣の石材に記されたさまざまな図形の刻印を観察し、意味を考えていくことのおもしろさも話されました。松江城の歴史を石垣観察からひもとく醍醐味をお話しされました。

